

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）と改善策等
1 総合学科の特長を活かし、GIGAスクール構想を踏まえた、個別最適な学びの授業実践を通して、確かな学力と個に応じた進路実現を図る。	① 総合学科の特長を活かし、生徒の多様なニーズに合わせた科目選択や体験活動を通して、生徒の進路実現を図る。	進路指導 教務	【満足度指標】 総合学科の特長を活かし、科目選択や体験活動が生徒の進路実現に繋がっている。	総合学科として、科目選択や様々な体験が生徒の進路実現に意義あるものとなっている。 (ア)よくあてはまる (イ)ややあてはまる (ウ)あまりあてはまらない (エ)あてはまらない	(ア)+(イ)の% 90%以上 A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満 D C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒・保護者)で調査する。	生徒 94.5% A 保護者 92.1% A	科目選択については、教務課・進路課の連携のもと保護者対象の系列説明会を実施している。進路行事については、進路ガイダンス、インターンシップ等、生徒が自己の進路について考える機会をタイムリーに設けたことが成果としてあらわれた。進路ガイダンスについては保護者に対しても行事を周知し、特に3年の保護者の参加が多く見られた。1・2年に対しても引き続き参加を促したい。
	② 毎時間の授業において、学習目標、流れを明示し、振り返りをさせることで、学習内容の理解度と達成感を高める。	教務	【成果指標】 授業改善をとおして分かりやすい授業を実践し、学習内容の理解度と達成感を高める。	授業が分かりやすいと回答する生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	生徒による授業評価アンケートで調査する。	95.4% A	授業評価アンケートの「この授業はわかりやすい」への肯定的評価（「そう思う」＋「だいたいそう思う」）は95.4%で、毎回90%を超えており問題は見られない。一方、「グループ活動や発表を取り入れている」への否定的評価（「あまりそう思わない」＋「そう思わない」）は12.0%で、ほぼ毎回気になる結果となっている。重点目標「主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業実践を通して、個に応じた進路実現を図る」を踏まえると、より発展的な学習を期待する生徒に応える活動を一層取り入れる段階にあるといえる。
	③ GIGAスクール構想に則り、従来のICT活用に加え、今年度DXハイスクールによって整備された電子黒板を活用した授業の在り方について研究を進	教務	【努力指標】 学習効果を高めることを目標に、活用方法について実践研究を進め、電子黒板とChromebookを使った公開授業を実施している。	年に2回以上電子黒板とChromebookを使った公開授業を行った教員の割合が A 100%以上 B 80%以上 C 60%以上 D 60%未満 (中間評価では1回の使用で評価する)	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価（教員）で調査する。	59% D	教員への学校評価アンケートの質問項目の一つにある「2学期中にChromebookを使って授業を行いましたか。」への回答が「まったく当てはまらない」以外を合わせて59.3%であった。これはICT機器を使用して授業を行う教員が減ったのではなく、校内に新規導入した電子黒板に入っているchromeOSからログインできるためchromebookを用いずに授業を行う教員が増えたことを示している。したがって改善の検討は必要なく、来年度からは質問項目を変更して、データを収集する必要がある。
	④ 個別進学指導や朝学習、模擬面接等の充実を図り、個々の生徒に応じた進路志望を達成する。	進路指導 各学年	【成果指標】 ア 国公立大学進学者数が、2人以上となっている。 イ 私立大学および看護・医療系上級学校進学者数が30%以上となっている。 ウ 就職内定率が、100%となっている。	ア・イ・ウの3指標のうち A 3指標すべてを達成 B 2指標を達成 C 1指標を達成 D 3指標とも達成できず	C、Dの場合、改善の検討を行う。	1月末現在	D	3月末において、国公立大学合格者は0名、私立大学および看護・医療系上級学校進学者は13%、就職内定率は99%であった。4年制大学進学希望者の数自体が減っており、指標を現実に即したのに見直したが、早期から大学受験に目を向けさせる働きかけが弱かった。また、就職試験においても選考漏れが多く、就職活動が長引いた。基礎学力定着のための教材や外部模試、進路行事を精選するとともに、学年団と連携し、進路に関する情報提供を適時行いたい。
学校運営協議会委員の評価				<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用し、生徒の探究心・基礎学力の向上を図ってほしい。 進学に苦戦しているようだが、生徒一人ひとりの進路実現を叶えてあげてほしい。 				
学校運営協議会委員の評価を踏まえた今後の改善策				<ul style="list-style-type: none"> DXハイスクールの指定を生かして、ICT活用能力や探究心を向上させ、基礎学力の定着を土台として、進路実現のために必要な学力の獲得を支援したい。 3年進級前から『なりたい自分』からの逆算で行動を促し、早期準備によって一人ひとりに時間をかけた手厚い進路支援を実現できるよう取り組んでいく。 				

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等
2 授業及び部活動や体験活動を柱として、生徒のコミュニケーション能力や規範意識、自律心及び自己肯定感の向上を図り、人間力の育成に努める。	① 登校指導や街頭指導、地域に出向いの活動等での活動等と挨拶ができるよう指導を行う。	生徒支援 各学年	【成果指標】 生徒・保護者・教員が「生徒は自ら進んで挨拶ができる」と評価している。	自ら進んで挨拶ができると回答した割合が生徒・保護者・教員のうち A 3者とも80%以上 B 2者が80%以上 C 1者のみ80%以上 D 全て80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒、保護者、教員)で調査する。	生徒 86.2% 保護者 81.6% 教員 70.4% B	昨年度末の同様の集計結果は 生徒87.9% 保護者84.0% 教員51.7% であり、比較をしてみると生徒・保護者は若干の減少、教員の数値が大幅に増加している。挨拶は相乗効果があると感じており、まずは教員自らが明るく声掛けをしようと率先したことが数値に表れているように感じる。生徒の意識が少しずつでも変化して、挨拶することの気持ちよさや大切さに気づいてもらえるよう、今後も全教員が意識していくことに努めたい。
	② 部活動を通して、生徒の自律心及び自己肯定感を向上させ、人間力を育成する。	SCH推進 室	【満足度指標】 生徒が部活動に主体的に取り組み努力することを通して、満足感や達成感を得ている。	部活動に対し、満足感や達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒)で調査する。	生徒 81.7% A	昨年同期76.3%に比べて5.4ポイント増で、評価Aとなった。今年度の新入生の部活動加入率が90%超となり、特に運動部への加入が多く、学校内でも活気のある雰囲気を感じられる。一方で、生徒数減の影響で、部員数の少ない部が増えてきている傾向は続いており、特に文化部で新入部員がゼロの部活がある。文化部は個人でできる活動が多い利点を活かすなど工夫が必要と考えられる。部活動全体としても、少人数への手厚い指導、充実した施設環境を活用し、生徒の満足感が得られる取り組みを検討していく。
	③ 「学校いじめ防止基本方針」をもとに、いじめの問題に学校が一丸となって組織的に対応する。	生徒支援	【努力指標】 いじめの未然防止に取り組む、発生時には迅速な対応をしている。	いじめの未然防止に取り組み、発生時には必要な情報を共有し、迅速な対応をする教職員の割合が A 100% B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(教員)で調査する。	92.6% B	1月現在、今年度は7件のいじめを認知している。管理職、担任、学年団、生徒指導が連携し、いじめ問題対策委員会を開き、迅速に対応した。とにかく被害者の救済を最優先に考え、安全安心の学校づくりに今後も努める。校内だけではなく、SNSによるトラブルがきっかけとなっているケースも見受けられる。生徒が教員の誰にも相談できる雰囲気作りも大切になる。些細な変化を見逃さずに迅速かつ適切に対応する意識を持っていきたい。
学校運営協議会委員の評価				<ul style="list-style-type: none"> 自分から挨拶する生徒が増えてきた。春は下を向いている生徒が多かったが、だんだんと増えてきた。 いじめの問題に学校が一丸となって組織的に対応する中で、いじめの迅速な対応が92.6%である。なぜ100%にならないのか。 				
学校運営協議会委員の評価を踏まえた今後の改善策				<ul style="list-style-type: none"> 朝の生徒玄関での挨拶運動を今後も根気強く継続していく。挨拶は強要せず自発的に出来るように見守っていきたい。 これまででもそうであったが、より積極的にいじめの認知をし、どんな些細なことも見逃さずいじめが起らない環境を作っていきたい。 				

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）と改善策等
3 SCH（スーパー・コミュニティ・ハイスクール）として、地域連携の充実や学校情報の積極的発信、学校業務の効率化を図り、保護者や地域に信頼される学校づくりを推進するとともに、生徒が主体的に地域の活性化に貢献する資質・能力を育む。	① 地元自治体の行事や社会貢献活動への参加など、地域と連携した活動をより推進する。	SCH 総務	【成果指標】 生徒が地域の行事や社会貢献活動など地域と連携した活動に積極的に参加している。	地域の活動に参加した生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	それぞれの活動後に生徒にアンケートをとる。	生徒 89.4% A	昨年同期83.5%に比べて5.9ポイント増であった。要因としては、文化祭を一般に開放したことや周年行事にかかわる様々な活動を行ったこと、また、学年有志や各部活動において積極的な地域行事への参加などが考えられる。今後も、能美市との連携事業をはじめ、イーグル隊、能美市インターアクトなど地域活動への継続的な参加を通して、地域の活性化に繋がる取り組みを行っていく。
	② ホームページの更新や学年や各課からの通信、メール配信を随時行い、学校の教育活動を積極的に発信する。	総務 SCH	【満足度指標】 本校の広報活動を通して、保護者が本校の教育活動や取り組みを理解し、満足している。	広報活動（学校ホームページ、学年・各課からの通信、メール配信）を通して、学校の取り組みがよくわかると回答する保護者の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(保護者)で調査する。	保護者 84.7% A	昨年の評価81.4%より3.3%増加している。今年度よりメール配信で月間の行事予定表を配信するようになり、各家庭で学校行事を確認しやすくなったものと考えられる。ホームページのアクセス数は昨年度より倍増しており、関心の高さがうかがえる。1学期から夏休みにかけての閲覧数が特に多いことから、周年行事の関連で増加したものと予想される。学校での日常生活など身近な内容を更新するとよりアクセスが増えるものと思われる。
	③ 教員が担当業務に応じてタイムマネジメントの意識を高め、学校業務の効率化を推進することで、勤務時間外の労働時間を削減する。	教頭 各課主任 学年主任	【成果指標】 全教員が業務の効率化に向けてタイムマネジメントの意識を高め、より一層の時間外勤務の削減を図っている。	時間外勤務が月45時間以上であった教員の年平均人数が A 5人未満 B 10人未満 C 15人未満 D 15人以上	C、Dの場合、改善の検討を行う。	教員の勤務時間記録で調査する。	10.6人 C	時間外勤務が月45時間以上であった教員の数の平均は、昨年度最終評価の7.3人と比べて増加した。前期・後期とも10.6人であった。教員アンケートにおいては、タイムマネジメントの意識は昨年度と比較すると89.6%から85.2%とやや減少している。 教員それぞれが複数の業務を担当し、それが多忙感の増加につながっていると思われる。特定の教員に負担がかかったり、多忙感が増加しないよう、管理職や主任が業務の進捗状況に気を配り、業務の平準化を図ることを心掛ける。
学校運営協議会委員の評価				<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方に知ってもらうことが重要である。生徒が外へ出ていく機会を増やし、地域の人が参加できる行事を増やして欲しい。 ・コミュニティスクールの指定を受けたのなら、なおのこと生徒全員に均等な地域と関われる機会を与えていくべきである。 				
学校運営協議会委員の評価を踏まえた今後の改善策				<ul style="list-style-type: none"> ・寺井高校を知ってもらうため学校行事等への地域の方の参加などを進めていく。そのうえで人間関係づくりに時間をかけて取り組んでいく。 ・総合的な探究の時間等を活用し、地域の方と関わりを持つ機会を増やすとともに、活動の中から生徒のコミュニケーション能力を高めていきたい。 				

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

No. 4

石川県立寺井高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）と改善策等
4 教員・生徒が非常時に自律的に適切な行動がとれるよう資質・能力及び危機管理意識を高め、安心して学校生活を送れるよう安全管理を徹底する。	① 防災避難訓練等を実施し、災害に対する危機管理意識を高め、教員・生徒が非常時に自律的に適切な行動がとれる資質・能力を養う。	教頭 総務	【成果指標】 防災訓練等を通して教員・生徒が非常時に自律的に適切な行動がとれ、危機管理意識が高まったと感じている。	防災避難訓練等から、非常時に自律的に適切な行動がとれ、危機管理意識が高まったと回答した教員・生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(教員・生徒)で調査する。	教員 96.3% A 生徒 90.2% A	昨年度より火災による避難の訓練は各ホーム単位ではなく、実際授業をしている教員による誘導にて行っている。より実際の場面を想定した訓練となっている。また、避難所運営ゲームを教員を対象に実施し、危機管理意識を高められている。また、津波等の災害による避難を想定して、和田山公園へ複数のルートで生徒が速やかにできる訓練を実施し、生徒の危機管理意識が高くなっている。
学校運営協議会委員の評価								
学校運営協議会委員の評価を踏まえた今後の改善策				<ul style="list-style-type: none"> ・能美市の防災センターの起震車による地震体験・煙体験をさせるなど、次年度は今年度の防災学習により体験を伴う活動になるよう取り組んでいく。 ・避難所運営ゲームなどを活用し、災害時に何ができてどう行動すべきなのか、生徒に考えさせる機会を作りたい。 				